

## シリーズ第5回 津野町 「重要文化的景観」申出区域

清流通信読者の皆様こんにちは。

今月の『重要文化的景観』の各市町レポートは津野町からです。

四万十川の最上流に位置する津野町は四万十川本流及び第2支流の北川、また土佐湾に注ぐ新莊川の3本の川を有しています。今回は四万十川を有する西地区（旧東津野村）についてご紹介します。

196 kmにも及び四万十川を発する源流点は津野町西北部の不入山（1336 m）に位置します。東斜面の源流点より落差を伴いつつ南に下り中土佐町へと流れる四万十川本流と、不入山の西斜面を発して西南に緩やかに下り橋原町へと流れる第2支流北川との二つの川が津野町より下流に流れています。その二つの川の両岸の斜面に住居が点在し、僅かな平野や傾斜地に残る棚田や段畑での農業の営みと周囲の広大な山林に支えられて、縄文時代より今日まで津野町は発展してきました。

源流部の不入山（1221,49ha）と津野町の南に位置する大古味山（1071,88ha）はいずれも国有林であり、古くより藩や国に管理され、伐採・搬出を繰り返してきました。伐採された大木は北川を流して中村の下田に搬出されてきました。

川と山を中心とした長い営みの中で、祖先は数々の文化的遺産を残してくれました。

津野町における文化的景観は、川の河岸に住居を配しその廻りの傾斜地には石垣による田畑を有し、裏山の山林をも一体化した複合的景観を特徴としています。

四万十川流域の重点地区に指定している「船戸地区」は、源流点の麓の山里で、落差のある川に沿う棚田と集落によって形成され、古くは縄文遺跡よりこの地に生活の跡を残しています。また、多くの民衆の支えとされてきた神社や祠も多く、花取り踊りなどの伝統芸能もこの地に伝わっています。

緩やかな川の流れを基調とする北川流域における重点地区としては、上流より「口目ヶ市地区」、「芳生野地区」、「北川地区」、「大古味地区」の4地区を指定いたしました。「口目ヶ市地区」は北川の最上流域に位置し天狗高原の山麓の集落でもあります。斜面に配された住宅は江戸の後期、明治、大正期の古民家が多く残っています。「芳生野地区」には「早瀬の一本橋」や、「サイフォン式水路」が、また「北川地区」には「つり橋」が残され、「津野山古式神楽」が伝承されています。「大古味地区」には「大ケヤキ」や対岸への耕作を目的とした物資の輸送に使用している「大古味のゴンドラ」など先人が長い年月の生活文化の中で築いてきた重要な構成要素が数多く残されています。



ここから始まる、196Km四万十川の源流点。



↑ 芳生野地区、早瀬の一本橋。



↑ 北川地区、茶畑の雪景色。



↑ 口目ヶ市集落の古民家。